

神戸RCの馬場様ようこそお越し下さいました。

現在、楽天に入団している済美高校出身の安楽投手。彼は数年前の選抜大会高校2年生のときに出場し、準優勝投手になりました。彼は5試合全て先発完投し、722球投げ大きな話題になり、高野連もそれから色々議論があり、来春の選抜大会から延長タイブレイク制を導入する準備を進めています。目的は選手の健康対策です。

延長タイブレイク制とは試合が延長戦に入った際、10回無死一、二塁から走者を置いて得点が入りやすい状況を設定し、攻撃を始めるルールです。

試合の勝敗を早くつけることが目的です。

社会人野球の都市対抗、全日本大学選手権でも行われています。

過去、高校野球の最多回数は1933年第19大会の中京商対明石中で、延長25回で日中商業高校が1対0で勝利。

1958年に延長18回、引き分け再試合の規定が設けられ、2000年からは15回に短縮。高野連は投手の保護に最も効果的なのは投球回数や投球数の制限と認めました。しかし複数の投手が必要となり、戦力の厚い強豪校と他の学校の格差が広がり、現時点の導入は困難、との味方を示しています。

現実的な改善への策が延長タイブレイク制であり、全国47の都道府県高野連を対象にしたアンケートでも38連盟が導入すべきだとしました。

甲子園出場校の投手の肩・肘の検査を担当する大阪警察病院の院長の話では、長いイニングを戦わずに勝負がつき、再試合の連投も避けられ、怪我の防止に有効とし、又、選手の身体を守るために必要不可欠で大学等で野球を続ける選手もおり、高校で導入しないほうが不自然と言われています。

来年は、選抜が90回、夏の全国選手権が100回の節目を迎えます。

選手が長時間戦い抜いた延長戦や再試合はファンの心に刻まれた場面が多く、また人の心を打つ場面も多い、だから高校野球が愛されてきたと思いますが、その延長戦がなくなるのは寂しいですが、球児の健康を考えると必要であると思われます。延長戦がなくなっても、一生懸命プレーしている姿に感動、熱闘は見られると思われます。

宮夙川RC岸下様、JUDY様、多田侑華様、ようこそいらっしやいました。

甲子園球場の話ですが、1924年に球場が完成し、その年はツタが植樹されました。コンクリートの外壁の装飾として成長が早くコストが安いことがツタを選んだ理由と言われています。

日本高校野球連盟は、21世紀に入ると老朽化した甲子園球場は改修されるだろうということで、ツタを伐採される前に球児に苗木を贈って育ててもらい甲子園に戻そうと考え、2000年夏、ツタの苗木を当時の加盟校4170校(今現在4000校を割る)に贈りました。2008年6月に加盟校が育てた生育状態の良い233校のツタが選ばれました。

兵庫県の琴丘高校(姫路市)も選ばれた1校です。高校球児にとっては甲子園出場が当然目標ですが、公立校の琴丘高校は野球ではまだ一度も甲子園に出場していませんし、ツタを育て8年間の時間を費やし甲子園にツタをもどしたことは素

晴らしいことだと思います。先輩から後輩に受け継がれツタを成長させたことにある意味感動でもあると思います。甲子園常連校の球児たちに、こういう高校野球があると知っていただきたいと思いましたが、現実には、琴丘高校の監督にツタの話を伺いましたところ、公立校ですから転勤もあり、この10年間で3代目の監督ということで、このいい話が前監督から申し伝えられなかった模様で、今の選手たちには何も伝えていないし、ツタの世話も何もしていないし、バックネットに生えているツタに関して無関心だそうです。私が、なぜツタの由来を話さないのか、することによって、ツタを見ることが練習の励みになり琴丘高校の伝統になるのではと尋ねると、監督は自分自身も由来を知らないし、聞いていないから、選手たちには何も言わないということです。何か感動的な話が、高野連も良い行事を行っていると思ったのですが、現実にはむなしく少し寂しい気持ちになりました。

監督と話をしている事を私たちのクラブに置き換えましたら、継続事業は難しいし、改めて大切なことだと感じました。今現在7項目の継続事業、支援事業がありますが、今後それらを発展させる為には、過去のこと・スタート時のことを学ぶ必要があると思いますので、何らかの形で学ぶ機会を作っていただきたいと願っております。